

戦略的創造研究推進事業
(社会技術研究開発)
平成24年度研究開発実施報告書

研究開発プログラム
「コミュニティで創る新しい高齢社会のデザイン」
研究開発プロジェクト
「社会資本を先導する歩行圏コミュニティづくり」

研究代表者 中林 美奈子
(富山大学大学院医学薬学研究部 准教授)

1. 研究開発プロジェクト名

「社会資本を先導する歩行圏コミュニティづくり」

2. 研究開発実施の要約

①研究開発目標

本研究は、元気な高齢者だけでなく身体が弱くなった高齢者も積極的に街に出て、生き生きと交流を楽しむことのできる生活圏を「歩行圏コミュニティ」と定義し、その実現に必要な条件を抽出することを目的とした実証研究である。

具体的には、コンパクトシティを標榜する富山県富山市の中心市街地（星井町地区が中心）において、富山大学、富山市行政、地域住民、地元産業界が協働で歩行補助車を活用した歩行支援活動を試み、まず、虚弱高齢者の生活を助ける歩行補助車の整備が都市中心部における歩行圏コミュニティ実現の基盤的条件であることを示す。次に、当該活動が高齢者のライフスタイルの変容ならびにコミュニティの活性化に繋がる可能性を検証し、高齢社会における歩行圏コミュニティの都市文化の普及発展を唱導する。現在、歩行補助車は病院や福祉施設の中など限られた場所でしか使われておらず、屋外で見かけることはほとんどないが、歩行補助車が地域高齢者の生活を助け、そのコミュニティでは見慣れた風景となれば歩行補助車はコミュニティの文化となる。道具の助けを多少借りながら自分で歩いて住み慣れた地域で普通の生活をする。それが本プロジェクトの目指す高齢社会のデザインである。

② 実施項目・内容

1) プロジェクトチームの結成とその運営

平成24年度のプロジェクトチームの基本方針は「地域住民との協働」であり、歩行支援活動の全てを地区自治振興会長・長寿会長と協働で実施した。

2) 歩行補助車のカスタマイズ

歩行支援活動の実践ならびに歩行補助車モニターを対象としたフォーカスグループインタビュー等より、本プロジェクトで開発中の歩行補助車の改善点を整理した。

3) 歩行支援活動の実施

(1) 歩行補助車モニター事業

歩行に不都合を感じる地域高齢者からモニターを募り、本プロジェクトで開発中の歩行補助車を2か月間貸し出し、日常生活の中で自由に使ってもらった。モニター開始前後に健康度や生活状況、歩行補助車に対する意識を測定し、歩行補助車が高齢者の生活を助けるツールとなり得るか否かを評価した。

(2) 歩行補助車PRイベント

コミュニティに歩行補助車の存在や価値を周知することを目的に、期間中3本の歩行補助車PRイベントを企画し、地区高齢者に参加を呼びかけた。応募があった地区高齢者、モニターとその家族・友人・知人が一緒に歩行補助車を押して富山市内の観光地・中心市街地に出かけ、街歩きを楽しんだ。地区長寿会会員を対象とした自記式質問紙調査により、歩行補助車の浸透度を評価した。

(3) 街歩きコースの設定とその検証会

歩行補助車用いた歩行圏コミュニティをデザインするためには、歩行補助車が使える都市環境の整備が重要な課題である。日常生活で歩行補助車を用いるための課題を都市環境の面から整理するために、街歩きコースの設定とその検証会を実施した。プロジェクトメンバーが星井町地区と商業中心地区を結ぶ約90分の街歩きコースを設定し、実際に歩行補助車を用いてそのコースを歩き、都市環境（公共交通機関、街路・歩行空間、立ち寄りスポット）の面から評価した。

(4) 地区長寿会会員を対象とした「健康と生活に関する調査」

歩行支援活動の効果（地区高齢者のライフスタイルの変化、歩行補助車のコミュニティへの浸透状況）を評価することを目的に、地区長寿会会員を対象に自記式質問紙調査を実施した。本調査は平成25年度、平成26年度にも同じ対象に同じ質問で実施する予定であり、今年度は今後の変化を評価するためのベースライン調査となる。

(5) 地区長寿会会長との意見交換会

歩行支援活動の効果（地域の活性化）を評価する1つとして、これまで歩行支援活動を協働で行ってきた地区長寿会会長を対象にフォーカスグループインタビューを実施した。地区長寿会会長の語りから、プロジェクト活動に継続的に参加している理由を述べていると思われる語りを抜き出し、プロジェクトチームの組織運営に不可欠な「住民参加の促進」に必要な要件を抽出した。

③主な結果

1) プロジェクトチームの結成とその運営

平成24年度のプロジェクトチームの基本方針は「地域住民との協働」であり、期間中、地区自治振興会長・長寿会長と協働で15イベント実施した。地区自治振興会長・長寿会長1人当たりのイベント参加回数は平均11.3回であった。

地区長寿会会長が継続してホコケン活動に参加する理由として、以下の5つの内容が語られた。(ア) 支えあって一緒に活動する会長仲間がいること、(イ) 目指すべきゴールが明確であること、(ウ) 活動の成果を実感できること、(エ) 自身で歩行補助車を利用し、歩行補助車が高齢者の生活を助ける道具であることを実感していること、(オ) ホコケン活動に参加するのが楽しいと思えることであった。

2) 歩行補助車の改善点

モニター座談会、安全試験、モニター車の劣化状況調査結果等から、次の7つの改善点が明らかになった。(ア) 車輪のインチアップと車輪断面の改善、(イ) ロック機構の見直し、(ウ) 折りたたみ機構の見直し、(エ) パーキングブレーキの改善、(オ) 速度制御装置の取り付け位置の検討、(カ) 座面の座り心地の改善と素材の再検討、(キ) カゴ取り付け位置と固定具の検討であった。

3) 今年度実施した歩行支援活動の評価

(1) 歩行補助車モニター事業

歩行補助車が高齢者の生活を助けるツールになり得るか否かを評価するために「歩行

補助車モニター事業」を実施した。モニター終了時の調査では23人中22人が「歩行補助車は生活の中で役に立った」と回答した。また、モニター開始前後で健康測定を実施した結果、2か月間という短期評価ではあるが、身体面、精神・心理面、社会面いずれの項目においても改善項目が多くみられた。さらに、モニター23人中16人はモニター終了後も継続使用を希望した。モニター参加者が少なく事例検討の域を出ないが、歩行補助車は高齢者の生活を助けるツールになり得る可能性が見出された。

(2) 歩行補助車 PR イベント

コミュニティに歩行補助車の存在や価値を周知するために3件の「歩行補助車PRイベント」を実施した。PRイベント実施前の平成24年9月に地区長寿会会員に実施した『健康と生活に関する調査』(1年目)において、本プロジェクトの認知度は10%未満であった。本年度調査は今後の変化を評価するためのベースライン調査であり、今後、追跡調査を行い、プロジェクト認知度、歩行補助車に対する意識の変化を定量的に調査していく予定であるが、平成24年9月以降「歩行補助車を押している人を街で見かけた」「モニターをしたい」等の声を聞くことが増え、歩行補助車がコミュニティに浸透してきた様子が伺えた。

(3) 街歩きコースの設定とその検証会

日常生活で歩行補助車を用いるための課題を都市環境の面から整理するために「街歩きコースの設定とその検証会」を2回実施した。地区長寿会長、行政関係者、大学教職員、大学生が3班に分かれ、星井町地区と商業中心地区を結ぶ90分の街歩きコースを設定した。各班で設定された街歩きコースの総歩行距離は平均1033mであり、富山市都心部で街歩きを楽しむためにはこの程度の距離が必要であることが示された。検証の結果、現状満足度が低いと評価された項目の多くはハード面の問題であり、その解決には行政や施設管理者に市民の声を反映するための活動が重要であるといえた。

4) 歩行圏コミュニティ実現プロセスの整理(経過報告)

平成23年10月から平成25年3月までのプロジェクト活動から、歩行圏コミュニティ実現のプロセスを「きづく-つなぐ-うごかす」という言葉で整理した。

3. 研究開発実施の具体的内容

(1) 研究開発目標

本研究は、元気な高齢者だけでなく身体が弱くなった高齢者も積極的に街に出て、生き生きと交流を楽しむことのできる生活圏を「歩行圏コミュニティ」と定義し、その実現に必要な条件を抽出することを目的とした実証研究である。

具体的には、コンパクトシティを標榜する富山県富山市の中心市街地(星井町地区が中心)(写真①②)において、富山大学、富山市行政、地域住民、地元産業界が協働で歩行補助車(写真③)を活用した歩行支援活動を試み、まず、虚弱高齢者の生活を助ける歩行補助車の整備が都市中心部における歩行圏コミュニティ実現の基盤的条件であることを示す。次に、当該活動が高齢者のライフスタイルの変容ならびにコミュニティの活性化に繋がる可能性を検証し、高齢社会における歩行圏コミュニティの都市文化の普

及発展を唱導する。現在、歩行補助車は病院や福祉施設の中など限られた場所でしか使われておらず、屋外で見かけることはほとんどないが、歩行補助車が地域高齢者の生活を助け、そのコミュニティでは見慣れた風景となれば歩行補助車はコミュニティの文化となる。道具の助けを多少借りながら自分で歩いて住み慣れた地域で普通の生活をする。それが本プロジェクトの目指す高齢社会のデザインである。

本研究の特徴は以下の2点である。

①歩行支援ツール「歩行補助車」を用いた歩行圏コミュニティをデザインする。

住み慣れた地域で歩いて暮らすことは高齢者の健康増進において極めて重要なライフスタイルであり、そのための社会環境の整備が重要な課題となっている。特に、高齢化率が高い都市中心部においては、都市の魅力と健康文化を融合した社会環境の整備、すなわち、歩いて暮らせるまちづくりが不可欠であり、このことは、高齢者・家族のニーズのみならず地域の各分野のニーズとしても高い。

都市中心部居住の魅力は、歩行圏に集積した都市機能とその賑わいから生み出される外出や交流といった高齢者の健康増進要因を日常生活として享受できる点にある。現在、都市中心部においては「歩く」という視点から都市構造の再編が行われている。しかし、整備された都市中心部に居住している高齢者であっても買い物や行事参加を控えている状況が多数存在し、その理由は歩行能力の低下（足が痛い、長く歩けない等）によることが多い。この状況を乗り越えるためには、歩行者空間の整備や公共交通の強化といったハード面での都市計画・環境整備と並行して、都市環境と高齢者の歩行能力のギャップを埋める手段を講じる必要がある。

都市環境と高齢者の歩行能力のギャップを埋めるための方策として、保健福祉分野では、高齢者個々人の歩行能力に焦点を当てた機能訓練事業や介護予防事業が積極的に展開されているが、歩行能力の低下は加齢に伴い避けて通れない現象であり、機能訓練等により低下の速度を遅くすることは可能であっても、低下を止めることは難しい。また、今後、後期高齢者の増加とそれに伴う虚弱・障害高齢者の増大が予測される中、機能や能力の向上を基盤とした機能訓練中心の支援には限界があり、これまでとは異なる発想での支援方法の開発が求められている。

本研究では、低下した歩行機能や能力を補完するために道具を使うという発想を基盤に歩行支援活動を展開し、このことが都市環境と高齢者の歩行能力のギャップを埋める手段になり得る可能性を示す。歩行を補助する道具には杖、歩行器、シルバーカー、車椅子、電動自動車、歩行支援用電動アシスト機等があるが、本研究では単なる移動手段にとどまらず、高齢者の生きる原動力に繋がる自力で歩くという行為にこだわった。すなわち、動力装置を用いない道具に焦点を当て、杖やシルバーカーよりも安全・快適かつ機能性の高い「歩行補助車」を用いた歩行支援活動により歩行圏コミュニティをデザインする。

②コミュニティを対象とした支援活動の方法論を提示する。

本研究のゴールはコミュニティの変化である。コミュニティという用語は、近隣、行政区といった空間的広がりとしての物理的・地理的な場の意味と、共通の関心や帰属意識、連帯感、共同の規範や制度などを持つ集団（人々）の意味を含む。本研究においては、場としてではなく、後者の「共通の環境（地理的・地理的環境、共通の関心や帰属

意識、連帯感、共同の規範や制度など)を持つ集団(人々)」として捉え、コミュニティを対象とした歩行支援活動を展開する。

コミュニティを対象とするアプローチの本質は、広く大多数の集団(人々)にコミュニティの課題に関する表層的な情報提供、例えば、「健康のために歩きましょう」「歩くことは大切です」などと教育することではない。「歩かない/歩けない」背景にある本質的な問題に目を向け、それを取り除くことであり、また、そのような行動を押しこめている圧力をコントロールすることである。本研究で実践する歩行支援活動にはこの視点を組み込み、当事者である高齢者もちろん、その家族、近隣の人々が「歩くこと/歩行補助車を使って歩くこと」の価値を受け入れ、コミュニティ全体で歩行圏コミュニティを実現するために必要な行動を起こしていくプロセスを支援する。本研究の結果ならびに研究プロセスをとおして得られた知見を記述することで、コミュニティを対象とした支援活動の方法論を提示する。

写真① 研究フィールドの紹介(富山市中心市街地)

■富山県富山市のまちづくり
 ー公共交通を軸としたコンパクトなまちづくりー



写真② 研究フィールドの紹介(富山市星井町地区)

■富山市星井町地区

JR富山駅

商業中心地区
(総曲輪・西町・中央通り)

星井町地区

- 富山商業中心地区に隣接
- 商業/住宅地区
- 人口データ(平成22年9月末)
 - 【人口】2677人
 - 【世帯数】1212世帯
 - 【高齢者割合】33.3%(市平均24.2%)
 - 【一人暮らし高齢者】9.1%(市平均7.2%)
 - 【長寿会会員数】約500人

写真③ 本プロジェクトで開発中の「歩行補助車」

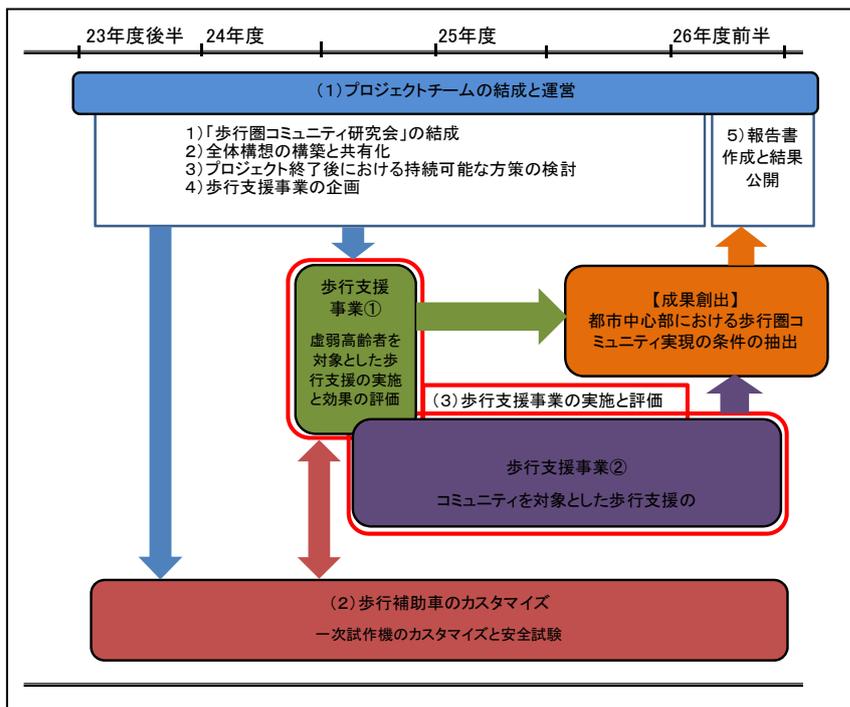


(2) 実施方法・実施内容

平成23年度は地域のステークホルダーに呼びかけ、富山大学、富山市行政、富山市星井町地区住民（自治振興会、長寿会連合会）、その他のメンバーで「富山大学歩行圏コミュニティ研究会（通称：ホコケン）」と名付けたプロジェクトチームを結成した。複数回の会議開催を通し、歩行支援活動の全体構想の構築とゴールの共有化を図った。また、歩行支援事業に用いる「歩行補助車」も準備した。

平成24年度は歩行支援活動開始の年と位置け、図1に示した全体の事業実施の流れに従って、1) プロジェクトチームの結成と運営、2) 歩行補助車のカスタマイズ、3) 歩行支援事業の実施と評価に取り組んだ。

図1. 全体の事業実施の流れ



1) プロジェクトチームの結成と運営

平成24年度のプロジェクトチームの基本方針は「地域住民との協働」であり、歩行支援活動の全てを地区自治振興会長・長寿会長と協働で実施した。

(1) チーム内でのミーティング等の開催状況

期間中に5回のホコケン研究会（プロジェクトメンバーが一堂に会する集まり）と19回の定例会（プロジェクト実施者の集まり）、15回の打ち合わせ会（プロジェクト実施者と協力者との集まり）を行った。

(2) 社会に向けた情報発信活動

本プロジェクトの活動状況を「24年度領域合宿」「第7回Smart Wellness City首長研究会」「第2回領域シンポジウム」「2013富山・横浜インターシティフォーラム」「みんなラボカフェ」等で報告した。特筆すべき点は、第2回領域シンポジウムとみんなラボカフェであった。

第2回領域シンポジウムでは、ポスターセッションで報告の機会を得た。富山から歩行補助車を3台持ち込み、6人の地区自治振興会長・長寿会長にポスター説明者の役割を担ってもらおうという趣向を凝らした。ポスター前には多くの参加者が集まり、歩行補助車を押したり、腰掛けてみたり、かごに荷物を置いたりしながら、様々な質問をいただいた。参加者からの質問には説明者の地区自治振興会長・長寿会長が熱く、丁寧に応えた。

みんなラボカフェとは、「高齢者による使いやすさ検証実践センターの開発（研究代表者：原田悦子先生（筑波大学大学院人間系心理学域教授））」プロジェクトで開設されているモノの作り手側の話を聞き、実際のモノに触れ、使いやすさや利用方法についてのディスカッションを行うワークショップである。原田プロジェクトと本プロジェクトは共に平成23年度採択プロジェクトであり、領域の全体会議等で原田先生とお会いするたびにコラボレーション企画を実現したいと話をしてきた。平成25年3月13日に念願のコラボレーション企画が実現した。茨城県つくば市に本プロジェクトで開発中の歩行補助車を3台持ち込み、原田プロジェクトの「みんなラボ」登録会員27人の方に検証をお願いした。ディスカッションでは「坂道にはどう対処するのか」「家の中で置き場所には困らないか」「エスカレーターに乗れるか」「下り坂でブレーキが利かなくなったらどうするか」「カーボンファイバー等の素材を使えばもっと軽くて丈夫である」「販売価格は」「利用者のニーズに合わせて安いから高いのまで多様なタイプが作れないか」「つくばでもショッピングセンターや病院に置いてあればいい」等の利用者目線かつ専門的な質問や意見が多く出された。

2) 歩行補助車のカスタマイズ

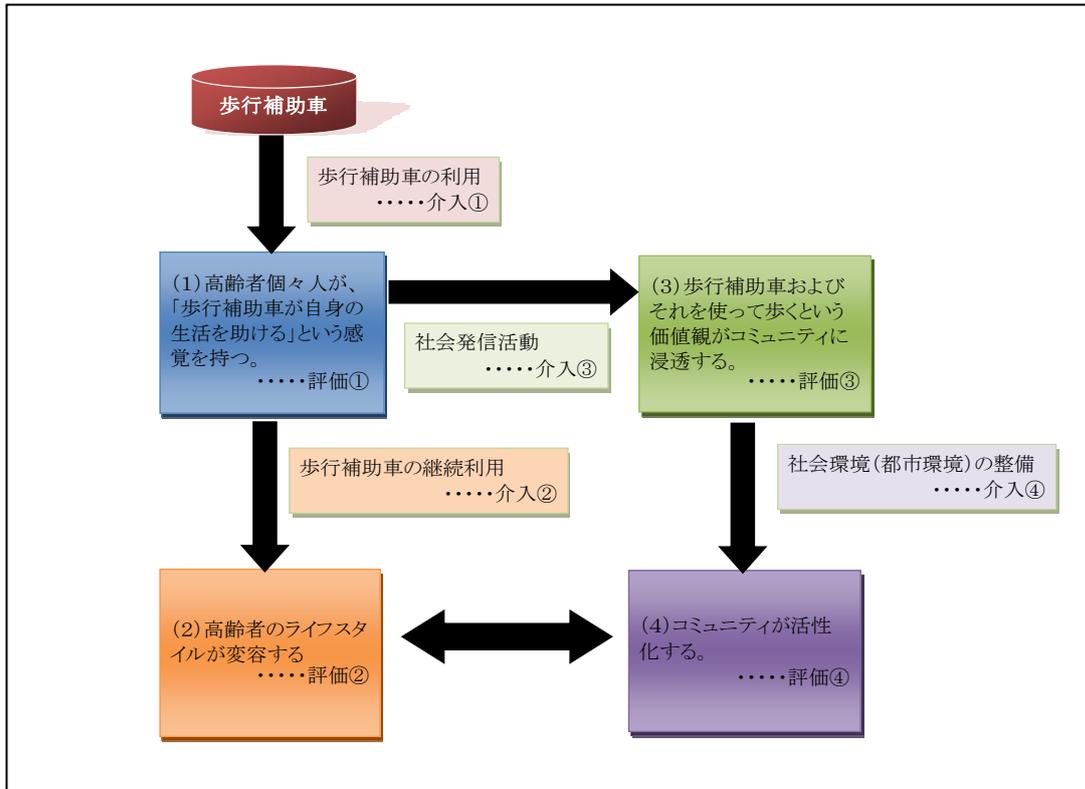
以下の機会を捉え、歩行補助車の改善点を整理した。

- (1) 平成24年9月～11月：歩行補助車モニター事業
- (2) 平成24年11月24日：モニター座談会

3) 歩行支援活動の実施

本プロジェクトにおける歩行支援活動の枠組みを図2に示した。平成24年度は介入①②③、評価①②③④に取り組んだ。

図2. 歩行支援活動の枠組み



(1) 歩行補助車モニター事業 (図2の介入①②、評価①②)

【目的】歩行補助車が高齢者の生活を助けるツールとなり得るか否かを評価する。

【内容】歩行に不都合を感じる地域高齢者からモニターを40人募集した。モニター募集にあたっては、モニター募集チラシ(写真④)の配布、地区自治振興会長・長寿会長のお誘い、星井町地区センターでの歩行補助車の実物展示等により募集を行った。応募があった29人中23人に歩行補助車を貸し出し、平成24年10月～12月の2か月間、日常生活の中で自由に使ってもらった。貸出し期間中は毎週土曜日(期間中9回)、地区内にある介護予防センターの一角で「ホコケン相談会」を開催し、モニターが自由に歩行補助車のメンテナンス、健康相談が受けられるようにした。(写真⑤)。モニター開始前後に「健康測定会」を開催し、モニターの健康度や生活状況、歩行補助車に対する意識を測定した。また、平成24年11月24日に星井町地区センターに集ってもらい、座談会を開催し、モニター期間中の生活状況や歩行補助車の使用状況、使用感について自由に話してもらった(写真⑥)。

写真④ モニター募集チラシ



チラシ表

チラシ裏

写真⑤ ホコケン相談会の様子



写真⑥ モニター座談会の様子



(2) 歩行補助車PRイベント1 (図2の介入③)

【目的】 コミュニティに歩行補助車の存在や価値を周知する。

【内容】 平成24年10月～11月の期間に歩行補助車PRイベントを企画し、地区高齢者に参加を呼びかけた。応募があった地区高齢者、モニターとその家族・友人・知人が

一緒に歩行補助車を押して富山市内の観光地・中心市街地に出かけ、街歩きを楽しんだ。期間中に3本のイベントを実施した（表1、写真⑦～⑨）。

表1. 平成24年度に行った歩行補助車PRイベントの概要

実施日時	イベント名	主催	参加者
10月23日(火) 9:30-16:30	エコな乗り物で港町岩瀬を巡ろう	長寿会	17人 (うち、地区住民12人)
11月17日(土) 11:45-16:30	日頃のご尽力に感謝・晩秋の称名滝までバスハイク	ホコケン	43人 (うち、地区住民29人)
11月24日(土) 10:00-16:00	女子大生と行く・秋の街歩きツアー	ホコケン	51人 (うち、地区住民21人)

写真⑦ エコな乗り物で港町岩瀬を巡ろう



写真⑧ 日頃のご尽力に感謝・晩秋の称名滝までバスハイク



写真⑨ 女子大生と行く・秋の街歩きツアー



(3) 歩行補助車PRイベント2 (図2の介入③)

【目的】 コミュニティに歩行補助車の存在や価値を周知する。

【内容】 平成24年11月に市内ホテルでプロジェクト関係者の結婚式が行われた。「足が不自由な祖父母が結婚式に参列してくれることになった。歩行補助車を使いたい」と希望があり、ホテルの了解・協力を得て、式場に歩行補助車を貸し出した (写真⑩)。

写真⑩ 結婚式場での活用



(4) 街歩きコースの設定とその検証会 (図2の介入③)

【目的】 歩行補助車用いた歩行圏コミュニティをデザインするためには、歩行補助車が使える都市環境の整備が重要な課題である。日常生活で歩行補助車を用いるための課題を都市環境の面から整理する。

【内容】 街歩きを「外出行動の中でも街に出かけ、好きな場所に立ち寄ってお茶を飲んだり、人とおしゃべりしながら散策し、まとまった時間を過ごす行為」と定義した。プロジェクトメンバーが星井町地区と商業中心地区を結ぶ約90分の街歩きコースを設定し、実際に歩行補助車を用いてそのコースを歩き、都市環境（公共交通機関、街路・歩行空間、立ち寄りスポット）の面から評価した。(表2、写真⑪)。

表 2. 街歩きコースの設定とその検証会

		参加したPJメンバー(人数)				
		大学 教員	大学 学生	地区 会長	行政	その 他
1回目	24.11.3(土)	8	9	6	2	0
2回目	24.11.23(金)	12	8	6	4	8

写真⑪ 街歩きコースの設定とその検証会



(5) 地区長寿会会員を対象とした「健康と生活に関する調査」(図2の評価②③)

【目的】歩行支援活動の効果を、①地区高齢者のライフスタイルの変化、②歩行補助車のコミュニティへの浸透状況の面から評価する。

【内容】地区長寿会会員を対象に自記式質問紙調査を実施した。調査の内容は、①属性、②健康の状況、③外出の状況、④人との交流や社会活動の状況、⑤ホコケン活動の認知状況等とした。本調査は平成25年度、平成26年度にも同じ対象に同じ質問で実施する予定であり、今年度は今後の変化を評価するためのベースライン調査となる。

(6) 地区長寿会会長との意見交換会(図2の評価④)

【目的】歩行支援活動の効果(地域の活性化)を評価するために、これまで歩行支援活動を協働で行ってきた地区長寿会長の語りから、プロジェクトチームの組織運営に不可欠な「住民参加の促進」に必要な要件を抽出する。

【内容】平成24年11月23日、地区長寿会会長を対象にフォーカスグループインタビューを実施した。インタビューでは、これまでのプロジェクト活動を振り返り、感じたことやプロジェクトチームの運営に対する考え等を聞き、逐語録を作成した。逐語録から継続してプロジェクト活動に参加している理由を述べていると思われる「継続参加の理由」の語りを抜き出し、類似性をもとに分類した。

(3) 研究開発結果・成果

1) 地区長寿会会長が捉える「住民参加を促す要件」

平成24年11月23日、地区長寿会会長を対象にフォーカスグループインタビューを実施した。当日参加した地区長寿会会長は6人であり、全員が男性、平均年齢は76.4歳であった。平成23年9月～24年3月の期間に協働で行った歩行支援事業等は15イベント(表3)であり、地区長寿会会長1人当たりのイベント参加回数は平均11.3回であった。

地区長寿会会長から本プロジェクトに継続して参加の理由として語られた内容は以下の5つであった。①支えあって一緒に活動する会長仲間がいること、②目指すべきゴールが明確であること(歩行補助車をコミュニティに浸透させる)、③活動の成果を実感でき

ること（歩行補助車を押して歩いている人を見かけるようになった、歩行補助車を持って歩いていると知らない人から値段や購入先を聞かれるようになった）、④自身が歩行補助車を利用し、歩行補助車が高齢者の生活を助ける道具であることを実感していること、⑤ホコケン活動に参加するのが楽しいと思えることであった。

本結果から、協働事業の実施において住民参加を促すためには、連帯意識の醸成や仲間づくりを通じて、プロジェクトメンバーのエンパワーメントを育む組織運営が重要であることが示された。

表3. 地区長寿会長と協働で実施した歩行支援事業等

NO	項目	参加したホコケン会員(人数)				
		大学 教員	大学 学生	地区 会長	行政	その 他
1	24.9～ ■『健康と生活に関する調査』 調査票の配布回収	3	0	7	0	0
2	24.9～ ■モニター募集	10	5	8	5	3
3	24.10.6(土) ■モニター健康測定会	9	8	8	0	0
4	24.10.13(土) ■相談会	6	0	3	0	0
5	24.10.20(土) ■相談会	3	0	3	0	0
6	24.10.23(火) ■PR イベント(街歩きツアー)	4	1	3	0	0
7	24.10.27(土) ■相談会	3	0	3	0	0
8	24.11.3(土) ■街歩き検証会(第1回)	8	9	6	2	0
9	24.11.3(土) ■相談会	3	0	3	0	0
10	24.11.10(土) ■相談会	4	0	2	0	0
11	24.11.17(土) ■PR イベント(バスハイク)	5	7	8	2	0
12	24.11.23(金) ■街歩き検証会(第2回) ■意見交換会	12	8	6	4	8
13	24.11.24(土) ■PR イベント(街歩きツアー) ■モニター座談会	11	9	8	4	5
14	24.12.1(土) ■モニター健康測定会	7	9	3	0	0
15	24.2.27(水) ■第2回領域シンポジウム(東京)	6	0	6	0	0

2) 本プロジェクトで開発中の「歩行補助車」の改善点

平成24年11月24日開催のモニター座談会では、生活の範疇で歩行補助車の機能や構造について困った経験はあまりないが、使う環境（道路、店、公共交通機関等）の方に問題があることが指摘された。

モニター座談会結果に加え、安全試験やモニター車の劣化状況等の調査結果から、次の7つの改善点が明らかになった。①車輪のインチアップ（125φ→180φ）と車輪断面の改善、②ロック機構の見直し（走行性能への悪影響排除）、③折りたたみ機構の見直し（折りたたみ機能要否検討、自立・固定できる機構への変更）、④パーキングブレーキの改善（タイヤへの局部的食い込み、ワイヤの処理）、⑤速度制御装置の取り付け位置の検

討、⑥座面の座り心地の改善と素材の再検討、⑦カゴ取り付けによる重心位置前方移動を車両重心に近づけるための工夫であった。

自分のモノとして選ばれる歩行補助車になるためには、機能性、安全性が高く、かつデザイン性が高い（カッコいい）モノでなければならない。本歩行補助車は、立ち上がり機能、姿勢保持機能、椅子機能、水平スタッキング機能、杖置き、ベル、かご等の生活補助機能を有し、デザインにもこだわった歩行補助具であり、これまでの使用感調査や社会実験から問題点を洗い出し、改良を重ねてきたものである。本結果は、これまでの結果と同様の想定内の結果であった。本歩行補助車の機能・構造的な改善点の抽出は飽和状態にあると考えられ、今後は製品化前の最終段階の基本設計と試作に取り組んでいく必要がある。

3) 今年度実施した歩行支援事業の評価

(1) 歩行補助車モニター事業

本事業の目的は、歩行補助車が高齢者の生活を助けるツールとなり得るか否かを評価することであった。

モニターは23人で男性8人(36.4%)、女性14人(63.6%)で平均年齢は79.5(SD6.2)歳であった。要介護認定を受けている者は6人(27.3%)で、その内訳は要支援1が3人、要介護1が2人、要介護3が1人であった。モニター終了時の調査では22人(95.7%)のモニターが「生活の中で役に立った」と回答しており、その理由は、【これまで苦勞していた日常生活が楽になった】【活動範囲が広がった】【将来を考える機会になった】という内容であった。また、モニター開始前後で健康測定を実施した結果、2か月間という短期評価ではあるが、身体面、精神・心理面、社会面いずれの項目においても改善項目が多くみられた。さらに、モニター23人中16人(70.0%)はモニター終了後も継続使用を希望した。

モニター参加者が少なく、事例検討の域を出ないが、以上の結果から歩行補助車は高齢者の生活を助けるツールになり得る可能性が見出された。

当初計画では、歩行補助車の利用が対象(モニター)の健康度(身体・精神・社会面)に及ぼす影響を交互法によるランダム化比較試験により評価する予定であった。しかし、対象が23人しか集まらず、ランダムに複数の群に割り付けることができなかつたため、評価デザインを前後比較デザインに変更し、介入前後の2時点で健康度を観察、比較した。募集にあたっては、募集チラシの配布に加え、地区自治振興会長と各町内会から選出された長寿会長、すなわち、地区の顔役が自ら高齢者宅を回り、モニター応募をお願いした結果であった。モニター応募を断られる理由は、「誰も使っていないものを使うのは恥ずかしい」「大げさである」「家が狭くて保管できない」「家族に反対された」等であった。この経験を通し、コミュニティに歩行補助車という新しい発想を受け入れる準備が十分でないことが分かった。この感覚が、その後の活動に大きな原動力になった。

※歩行補助車が生活の中で役に立ったと回答した理由

荷物、重い物を持って歩けるので、買い物、ごみ出し、お寺詣り、散歩がしやすくなった。

- ・楽に歩けるようになった。
- ・他人の手を借りずにひとりで歩けるので助かる。
- ・旅行に行くことができた。
- ・今後、足腰が弱くなった時のことを考え得る機会になった。

※健康測定の結果1)生活体力(前後比較評価:対応のあるt検定)

【改善が見られた項目】①握力、②ファンクショナルリーチ、③重心動揺(総軌跡長)、④重心動揺(総面積)、⑤開眼片足立ち時間

【変化が見られなかった項目】①5m最大歩行時間、②5m歩数、③長座体前屈

2)外出回数(前後比較評価:対応のあるt検定)

【改善が見られた項目】徒歩での外出回数

【改善が見られなかった項目】外出回数

3)精神・心理面(前後比較評価:対応のあるt検定)

【改善が見られた項目】抑うつ得点

4)社会面(終了時のみ調査)

- ①歩行補助車を使うことに対する心理的抵抗感:開始時はあったが今はない者30.4%
- ②歩行補助車PRイベントに参加した者73.9%
- ③モニター期間中、友人知人に歩行補助車をPRした者69.6%

※モニター終了時の感想(自由記載)

体調が良くなった。こむら返りが起きない。つま先立ちできるようになった。自分でちゃんと歩けるようになった。前は歩くのが苦手だったけど、今は自信になった(82歳女性)／近所の病院まで歩いていけるようになった。信号が1回で渡りきれようになってうれしい(81歳女性)／膝がちょっと楽になった気がする(88歳女性)／自信を持って歩けるようになった(67歳女性)／歩くのが楽になった(85歳女性)／イベントに参加して楽しかった(72歳女性)／歩こうという意欲が持てた(77歳女性)／PR活動にやりがいを感じた(85歳男性)

(2) 歩行補助車 PR イベント

本事業の目的は、コミュニティに歩行補助車の存在や価値を浸透させることであった。PR イベント実施前の平成24年9月に地区長寿会会員に実施した『健康と生活に関する調査』(1年目)において、本プロジェクトの認知度は10%未満であった。本年度調査は今後の変化を評価するためのベースライン調査であり、今後、追跡調査を行い、プロジェクト認知度、歩行補助車に対する意識の変化を定量的に調査していく予定であるが、平成24年9月以降「歩行補助車を押している人を街で見かけた」「モニターをしたい」等の声を聞くことが増え、歩行補助車がコミュニティに

浸透してきた様子が伺えた。

※平成24年9月現在の状況(地区長寿会会員397人(回収率78.5%(暫定))

- ①「ホコケン」プロジェクトが行われているのを知っている者の割合 9.5%
- ②「ホコケン」プロジェクトに賛同する者の割合 85.0%
- ③「ホコケン」プロジェクトに参加してみたいと思う者の割合 42.4%

(3) 街歩きコースの設定とその検証会

歩行補助車用いた歩行圏コミュニティをデザインするためには、歩行補助車が使え都市環境の整備が重要な課題である。本事業の目的は、日常生活で歩行補助車を用いるための課題を都市環境の面から整理することであった。期間中に2回の検証会を実施した。以下に1回目の結果を示す。

地区長寿会長、行政関係者、大学教職員、大学生が3班に分かれ、星井町地区と商業中心地区を結ぶ90分の街歩きコースを設定した。各班で設定された街歩きコースの総歩行距離は平均1033mであり、富山市都心部で街歩きを楽しむためにはこの程度の距離が必要であることが示された。

検証の結果、【低現状満足/高改善要求】と評価された項目は、①公共交通機関では、「乗降りのしやすさ(バス)(市電)」「車内での歩行補助車の置き場所(バス)(市電)」「乗務員の対応(バス)(市電)」であった。②街路・歩行空間では、「横断(横断歩道)(信号機の長さ)」「歩道(地割れ)(障害物)」「休憩場所」「景観(ショッピングカートの放置)」であった。③立ち寄りスポットでは、「施設構造(トイレ)(段差)」「休憩場所」であった。【低現状満足/低改善要求】と評価された項目は、②街路・歩行空間では、「歩道(傾斜)(凹凸)(段差)」「景観(商店街のにぎわい)」であった。③立ち寄りスポットでは、「施設構造(入口)(段差)(歩行補助車の置き場所)」であった。【高現状満足/低改善要求】と評価された項目は、①公共交通機関では、「利便性(バス)(市電)」、「乗降りのしやすさ(セントラム)」、「車内での歩行補助車の置き場所(セントラム)」であった。②街路・歩行空間では、「歩道(セントラム周辺)(道幅)」「景観(街並みの美しさ)(商店街のにぎわい)」であった。③立ち寄りスポットでは、「施設構造(店内の広さ)(エレベータの広さ)(歩行補助車の置き場所)」「休憩場所」「おすすめポイントがある(文化)(おいしさ)(店の雰囲気)(店員さんとの交流)(値段の手ごろ感)(にぎわい)(タバコが吸える)」であった。【高現状満足/高改善要求】と評価された項目はなかった。

現状満足度が低いと評価された項目の多くはハード面の問題であり、その解決には行政や施設管理者に市民の声を反映するための活動が重要であるといえた。

4) 歩行圏コミュニティを実現するためのプロセス(経過報告)

これまで(平成23年10月～25年3月)のプロジェクト活動を整理すると、歩行圏コミュニティ実現のプロセスは表4に示したとおり、「きづく-つなぐ-うごかす」という言葉で説明することができた。その要点は以下のとおりである。

①プロジェクト活動の出発点は研究者が表出しているコミュニティの課題に気づくことである。表出しているコミュニティの課題とは地域住民が認識している課題である。地域住民は個人個人の体験と行政の広報やマスコミを通して課題を認識すると考え、研究者は既存資料を丁寧に分析し、星井町地区の高齢化率が旧富山地域で2番目に高いこと、富山市がコンパクトシティを標榜し星井町地区を含む都市中心部で歩いて暮らせるまちづくりに取り組んでいることに注目した。そして、歩行圏コミュニティの実現という青写真を描いた。

②次に、歩行圏コミュニティの実現を一緒に実践する仲間を探した。コミュニティの課題を主体的に解決するための極めて重要な資源（リソース）は、コミュニティにおいて発言力・影響力が大きく、かつ、人柄が良くリーダーシップ力が高い「人」である。研究者がそれまでに培ってきた人脈の太さとネットワークの軽さにより、その人が誰であるのかを知る（気づく）ことができた。本プロジェクトにおける資源（リソース）は、地区自治振興会長・長寿会長、行政各課の一定以上の役職を有する人々であった。

③地区自治振興会長・長寿会長、行政関係者、その他の顔を繋ぐ場として「歩行圏コミュニティ研究会：ホコケン」を結成し、face to faceの会議（研究会・定例会）を複数回開催した。そして、初年度（23年度）の会議においては研究者の願いを繰り返し伝えた。研究者の願いは2つであった。1つは本プロジェクトのゴールであり、実現したいコミュニティの変化が「歩行補助車がコミュニティで見慣れた風景になる」「（富山市ですでに事業化されているコミュニティサイクル事業を例にあげ）水色の自転車の横に歩行補助車が並ぶ」ことであること、2つはプロジェクト参加の依頼であり、「ホコケン活動に協力してほしい」「一緒に活動して欲しい」ことを何回もお願いした。研究者の願いを表明することで、関係者も研究者の願いに気づき、研究者と一緒に活動することを受け入れた。研究者は自分たちの想いを研究計画書に変換し、実践活動がスタートした。

④実践活動において一番最初に行ったことは、地区自治振興課長・長寿会長と一緒に地区長寿会会員約500人を訪ね、「健康と生活に関するアンケート調査」の依頼と歩行補助車モニター応募のお誘いであった。モニター応募のお誘いでは、思うようにモニター応募者が見つからず苦戦した。しかし、この経験が表出した課題の背景にあるコミュニティの問題、すなわち、地区の住民に歩行補助車に対する心理的抵抗感があることに気づくきっかけになった。また、街歩きコースの設定とその検証会を通し、地区自治振興課長・長寿会長自身が「歩行補助車が生活に役に立つ道具であること」「街なかで歩行補助車を使うためには都市整備が必要であること」を実感した。そして、その感覚が地区自治振興会長・長寿会長の問題意識を高め、地区自治振興会長・長寿会長自らが「地区の人々に歩行補助車のことを知ってもらわなければならない」との願いを表明するに至った。研究者は地区自治振興課長・長寿会長と相談をしながら、バスハイクや街歩きツアー等の歩行補助車PR事業ができる限り地区住民の要望を満たし、満足感が得られるようにコーディネートした。関係者の気持ちを繋ぐ上で最も重要なことは、関係者が力を合わせてアクションを起こし、その中で関係者個人個人が自身の問題意識に気づき、それを表明することであった。

⑤一緒にアクションを起こす中で、街で歩行補助車を押している人を見かけたり、地区住民から歩行補助車について質問を受けるようになったり、コミュニティの変化に気づく場面を体験するようになった。その体験は、一緒にアクションを起こしている関係者に対する尊敬や感謝の気持ちを生み、また、自身の気持ちの中に本プロジェクトにか

かわる満足感や社会貢献感が芽生えた。実践活動の結果（成果）と関係者の関係性の心地よさが実践活動の継続に繋がった。

⑥次年度の課題は、コミュニティの取り組みを行政の施策や関係機関団体の取り組みに繋ぎ、行政と協働で「歩行圏コミュニティ実現」に向けて動き出すことである。本プロジェクトの成果が行政の計画や予算に反映されることを目指して、地区自治振興会長・長寿会長等と一緒に実践活動に取り組んでいきたい。

表4. 歩行圏コミュニティを実現するためのプロセス

	きづく	つなぐ	うごかす
23年度	<p>■研究者が表出しているコミュニティの課題に気づく →研究者の問題意識・既存資料の分析より課題に気付く【高齢化】【歩いて暮らせるまちづくり】 →プロジェクトの青写真を描く 【歩行圏コミュニティの実現】</p> <p>■研究者がコミュニティの資源に気づく →これまでの人脈とフットワークを駆使 【地区の意思決定者:自治振興会長・長寿会長】 【行政の意思決定者:役職者】</p> <p>■関係者が研究者の想いに気づく 【協力しよう】</p>	<p>※赤字は協働事業</p> <p>■顔を繋ぐ →顔を合わせる場を設定する 【歩行圏コミュニティ研究会(定例会・研究会)】</p> <p>■研究者の想いを繋ぐ① →研究者の願いを表明する (本プロジェクトのゴール) 【歩行補助車がコミュニティで見慣れた風景になる】【水色のレンタル自転車の横に歩行補助車が並ぶ】 (関係者に協力を依頼する) 【ホコケン活動に協力してほしい】 【一緒に活動してほしい】</p>	

24年度

<p>■研究者・地区自治振興会長・長寿会長が表出した課題の背景にあるコミュニティの課題にきづく (モニター募集がうまくいかない体験) 【市民には新しいモノ(歩行補助車)を受け入れることに対する心理的抵抗感がある】 (歩行補助車使用体験) 【歩行補助車が自身の生活に役に立つという感覚を持つ】 【ハード面での都市整備の問題を認識する】</p> <p>■地区自治振興会長・長寿会長が歩行圏コミュニティ実現の必要性に気づく →地区自治振興会長・長寿会長が実践活動についての願いを表明する 【地区の人々に歩行補助車のことを知ってもらわなければならない】</p>	<p>■研究者の想いを繋ぐ② →研究者の想いを研究計画所に変換する 【研究計画所の作成】</p> <p>■関係者の気持ちを繋ぐ① →みんなの力を合わせて一緒にアクションを起こす①(地区住民ひとり一人に出会う) 【健康と生活に関するアンケート調査】【歩行補助車モニター募集】</p> <p>■関係者の気持ちを繋ぐ② →みんなの力を合わせて一緒にアクションを起こす②(関係者自ら歩行補助車体験) 【街歩きコースの設定とその検証会】</p> <p>■関係者の気持ちを繋ぐ③ →みんなの力を合わせて一緒にアクションを起こす③(コミュニティに歩行補助車を浸透させる) 【歩行補助車PR事業:バスハイク、街歩きツアー】</p>	
---	---	--

<p>■関係者がコミュニティの変化に気づく 【街で歩行補助車押している人を見かける】【地区の人から歩行補助車の質問を受ける】</p> <p>■関係者間の関係の心地よさと充実感に気づく</p>		
<p>25年度～</p>	<p>■コミュニティの取り組みを行政の施策や関係機関団体の取り組みに繋ぐ</p>	<p>■行政の計画や予算に反映される</p> <p>■コミュニティと行政が協働で「歩行圏コミュニティ実現に向けて動き出す。</p>

(4)会議等の活動

・実施体制内での主なミーティング等の開催状況

年月日	名称	場所	概要
24.4.1	第9回定例会	富山大学五福キャンパス	・第4回定例会の準備
24.5.8	第4回研究会	富山第一ホテル	・23年度報告と24年度計画 ・意見交換
24.5.25	第10回定例会	富山大学五福キャンパス	・進捗状況報告と作業確認
24.6.1	第11回定例会	富山大学五福キャンパス	・進捗状況報告と作業確認
24.8.1	第12回定例会	富山大学五福キャンパス	・進捗状況報告と作業確認
24.8.1	企業担当者打合せ会	富山大学五福キャンパス	・IT企業A社担当者と意見交換
24.8.28	第13回定例会	富山大学五福キャンパス	・第5回研究会の準備
24.9.4	星井町関係者打合せ会	星井町地区センター	・第5回研究会事前打ち合わせ（自治振興会長）
24.9.11	第5回研究会	富山第一ホテル	・プロジェクト進捗状況報告 ・24年度に行う歩行支援事業の詳細説明と意見交換、役割分担

24.9.26	富山市関係者打合せ会	富山市役所	・担当者と意見交換
24.9.28	第14回定例会	角川介護予防センター	・9/29開催「健康測定会」準備
24.9.29	第15回定例会	角川介護予防センター	・9/30開催「歩行補助車運搬」準備
24.10.5	富山市関係者打合せ会	富山市役所	・担当者と意見交換
24.10.5	第16回定例会	富山大学五福キャンパス	・10/6開催「歩行補助車貸出し」準備
24.10.6	第17回定例会	角川介護予防センター	・10/13開催「ホコケン相談会」準備
24.10.9	富山市関係者打合せ会	(株)まちづくりとやま	・担当者と意見交換
24.10.13	第18回定例会	角川介護予防センター	・10/20開催「ホコケン相談会」準備
24.10.20	第19回定例会	角川介護予防センター	・10/27開催「ホコケン相談会」準備
24.10.27	第20回定例会	角川介護予防センター	・11/3開催「ホコケン相談会」「第6回研究会」準備
24.10.30	第21回定例会	富山大学学長室	・学長との懇談会（本プロジェクトの説明と懇談）
24.11.3	第6回研究会	角川介護予防センター	・プロジェクト進捗状況報告 ・実践活動「街歩きコースの設定とその検証会①」
24.11.5	星井町関係者打合せ会	星井町地区センター	・11/24開催「サイトビジット」準備
24.11.10	第22回定例会	角川介護予防センター	・11/17開催「歩行補助車PRイベント」準備
24.11.17	第23回定例会	角川介護予防センター	・11/23-24開催「サイトビジット」準備
24.11.17	星井町関係者打合せ会	星井町地区センター等	・11/23-24開催「サイトビジット」事前打ち合わせ（自治振興会長・長寿会会長）
24.11.23	第7回研究会	(株)まちづくりとやま等	・サイトビジット ・プロジェクト進捗状況報告 ・実践活動「街歩きコースの設定とその検証会②」 ・意見交換会「協働を成功させるための要因」
24.11.24	第8回研究会	星井町地区セ	・サイトビジット

		ンター等	・実践活動「女子大生と行く秋の街歩きツアー」 ・昼食交流会 ・座談会「今後のプロジェクトのあり方」
24.11.30	第24回定例会	角川介護予防センター	・12/1開催「健康測定会」準備
25.1.11	第25回定例会	(株)まちづくりとやま	・25年度計画
25.1.18	富山市関係者打合せ会	富山市役所	・副市長との懇談会（25年度計画の説明と懇談）
25.1.25	企業担当者打合せ会	B社	・福祉機器製作メーカーB社担当者と意見交換
25.2.6	星井町関係者打合せ会	星井町地区センター等	・2/27開催「領域シンポ」参加事前打ち合わせ（自治振興会長・長寿会会長）
25.2.19	企業担当者打合せ会	富山大学高岡キャンパス	・スポーツウェアメーカーC社担当者と意見交換
25.3.4	富山市関係者打合せ会	富山市役所	・担当者と意見交換
25.3.8	第26回定例会	富山大学杉谷キャンパス	・3/13開催「原田PJコラボサイトビジット」準備
25.3.11	第27回定例会	富山大学五福キャンパス	・25年度計画
25.3.15	企業担当者打合せ会	富山大学杉谷キャンパス	・福祉機器レンタル業者D社担当者と意見交換
25.3.18	富山市関係者打合せ会	富山市役所	・担当者と意見交換
25.3.26	富山市関係者打合せ会	(株)まちづくりとやま	・担当者と意見交換

4. 研究開発成果の活用・展開に向けた状況

「歩行圏コミュニティの実現」を目指して、地域住民と様々な形で協働している。次年度は行政との協働をいかに進めるかという問題が最大の課題であり、今年度中から、市担当者や関連企業担当者との意見交換の機会を設け、次年度の方向性を検討している。

5. 研究開発実施体制

(1) 総括グループ

- ① リーダー名：中林美奈子（富山大学大学院医学薬学研究部 准教授）
- ② 実施項目：研究調整と全体総括、プロジェクトチームの結成と体制整備

(2) 歩行補助車のカスタマイズグループ

- ① リーダー名：河原雅典（富山大学芸術文化学部 准教授）、サブリーダー名：木下 功士（富山大学工学部 技術職員）
 - ② 実施項目：歩行補助車の使用感調査と基本設計、歩行補助車の管理業務
- (3) 虚弱高齢者を対象とした歩行支援の実施と評価グループ
- ① リーダー名：鳥海清司（富山大学人間発達科学部 教授）
 - ② 実施項目：歩行補助車モニター事業の実施と評価
- (4) コミュニティを対象とした歩行支援の実施グループ
- ① リーダー名：丸谷芳正（富山大学芸術文化学部 教授）
 - ② 実施項目：コミュニティに歩行補助車を浸透させるための仕掛けづくり、地区・中心商業地区の回遊性を高める仕掛けづくり
- (5) コミュニティを対象とした歩行支援の評価グループ
- ① リーダー名：新鞍真理子（富山大学大学院医学薬学研究部 准教授）
 - ② 実施項目：コミュニティを対象とした歩行支援の評価に関する企画・調整

6. 研究開発実施者

代表者・グループリーダーに「○」印を記載

研究グループ名：総括グループ

	氏名	フリガナ	所属	役職(身分)	担当する研究開発実施項目
○	中林 美奈子	ナカバヤシ ミナコ	富山大学医学薬学研究部(医学)	准教授	全体総括
	丸谷 芳正	マルヤ ヨシマサ	富山大学芸術文化学部	教授	歩行支援の実施と評価 (コミュニティ)
	鳥海 清司	トリウミ キヨシ	富山大学人間発達科学部	教授	歩行支援の実施と評価 (虚弱高齢者)
	新鞍 真理子	ニイクラ マリコ	富山大学医学薬学研究部(医学)	准教授	歩行支援の実施と評価 (コミュニティ)
	河原 雅典	カワハラ マサノリ	富山大学芸術文化学部	准教授	歩行補助車のカスタマイズ
	木下 功士	キノシタ コウジ	富山大学工学部	研究員	歩行補助車のカスタマイズ
	永井 嘉隆	ナガイ ヨシタカ	富山大学地域連携推進機構	コーディネーター	研究組織運営支援
	梶 護	カジ マモル	富山大学地域連携推進機構	コーディネーター	研究組織運営支援
	鏡森 定信	カガミモリ サダノブ	富山産業保健推進センター	所長	研究組織運営支援
	成瀬 優知	ナルセ ユウチ	富山大学医学薬学研究部(医学)	教授	研究組織運営支援
	鳴尾 明子	ナルオ アキコ	富山大学医学薬学研究部(医学)	助教	研究組織運営支援
	寺西 敬子	テラニシ ケイコ	富山大学医学薬学研究部(医学)	助教	研究組織運営支援

研究グループ名：歩行補助車カスタマイズグループ

	氏名	フリガナ	所属	役職(身分)	担当する研究開発実施項目
	中林 美奈子	ナカバヤシ ミナコ	富山大学医学薬学研究部(医学)	准教授	全体総括
	丸谷 芳正	マルヤ ヨシマサ	富山大学芸術文化学部	教授	歩行支援の実施と評価 (コミュニティ)
	鳥海 清司	トリウミ キヨシ	富山大学人間発達科学部	教授	歩行支援の実施と評価 (虚弱高齢者)
	新鞍 真理子	ニイクラ マリコ	富山大学医学薬学研究部(医学)	准教授	歩行支援の実施と評価 (コミュニティ)
○	河原 雅典	カワハラ マサノリ	富山大学芸術文化学部	准教授	歩行補助車のカスタマイズ
○	木下 功士	キノシタ コウジ	富山大学工学部	研究員	歩行補助車のカスタマイズ
	永井 嘉隆	ナガイ ヨシタカ	富山大学地域連携推進機構	コーディネーター	研究組織運営支援
	梶 護	カジ マモル	富山大学地域連携推進機構	コーディネーター	研究組織運営支援
	鏡森 定信	カガミモリ サダノブ	富山産業保健推進センター	所長	研究組織運営支援
	成瀬 優知	ナルセ ユウチ	富山大学医学薬学研究部(医学)	教授	研究組織運営支援
	鳴尾 明子	ナルオ アキコ	富山大学医学薬学研究部(医学)	助教	研究組織運営支援
	寺西 敬子	テラニシ ケイコ	富山大学医学薬学研究部(医学)	助教	研究組織運営支援

研究グループ名：虚弱高齢者を対象とした歩行支援グループ

	氏名	フリガナ	所属	役職(身分)	担当する研究開発実施項目
	中林 美奈子	ナカバヤシ ミナコ	富山大学医学薬学研究部(医学)	准教授	全体総括
	丸谷 芳正	マルヤ ヨシマサ	富山大学芸術文化学部	教授	歩行支援の実施と評価 (コミュニティ)
○	鳥海 清司	トリウミ キヨシ	富山大学人間発達科学部	教授	歩行支援の実施と評価 (虚弱高齢者)
	新鞍 真理子	ニイクラ マリコ	富山大学医学薬学研究部(医学)	准教授	歩行支援の実施と評価 (コミュニティ)
	河原 雅典	カワハラ マサノリ	富山大学芸術文化学部	准教授	歩行補助車のカスタマイズ
	木下 功士	キノシタ コウジ	富山大学工学部	研究員	歩行補助車のカスタマイズ
	永井 嘉隆	ナガイ ヨシタカ	富山大学地域連携推進機構	コーディネーター	研究組織運営支援
	梶 護	カジ マモル	富山大学地域連携推進機構	コーディネーター	研究組織運営支援
	鏡森 定信	カガミモリ サダノブ	富山産業保健推進センター	所長	研究組織運営支援
	成瀬 優知	ナルセ ユウチ	富山大学医学薬学研究部(医学)	教授	研究組織運営支援
	鳴尾 明子	ナルオ アキコ	富山大学医学薬学研究部(医学)	助教	研究組織運営支援
	寺西 敬子	テラニシ ケイコ	富山大学医学薬学研究部(医学)	助教	研究組織運営支援

研究グループ名：コミュニティを対象とした歩行支援グループ

	氏名	フリガナ	所属	役職(身分)	担当する研究開発実施項目
	中林 美奈子	ナカバヤシ ミナコ	富山大学医学薬学研究部(医学)	准教授	全体総括
○	丸谷 芳正	マルヤ ヨシマサ	富山大学芸術文化学部	教授	歩行支援の実施と評価 (コミュニティ)
	鳥海 清司	トリウミ キヨシ	富山大学人間発達科学部	教授	歩行支援の実施と評価 (虚弱高齢者)
○	新鞍 真理子	ニイクラ マリコ	富山大学医学薬学研究部(医学)	准教授	歩行支援の実施と評価 (コミュニティ)
	河原 雅典	カワハラ マサノリ	富山大学芸術文化学部	准教授	歩行補助車のカスタマイズ
	木下 功士	キノシタ コウジ	富山大学工学部	研究員	歩行補助車のカスタマイズ
	永井 嘉隆	ナガイ ヨシタカ	富山大学地域連携推進機構	コーディネーター	研究組織運営支援
	梶 護	カジ マモル	富山大学地域連携推進機構	コーディネーター	研究組織運営支援
	鏡森 定信	カガミモリ サダノブ	富山産業保健推進センター	所長	研究組織運営支援
	成瀬 優知	ナルセ ユウチ	富山大学医学薬学研究部(医学)	教授	研究組織運営支援
	鳴尾 明子	ナルオ アキコ	富山大学医学薬学研究部(医学)	助教	研究組織運営支援
	寺西 敬子	テラニシ ケイコ	富山大学医学薬学研究部(医学)	助教	研究組織運営支援

7. 研究開発成果の発表・発信状況、アウトリーチ活動など

7-1. ワークショップ等

該当なし

7-2. 社会に向けた情報発信状況、アウトリーチ活動など

①書籍、DVD（タイトル、著者、発行者、発行年月等）

該当なし

②ウェブサイト構築（サイト名、URL、立ち上げ年月等）

該当なし

③（7-4.参照）以外のシンポジウム等への招聘講演実施等

- (a) 神田昌幸（富山市副市長/本プロジェクト研究協力者）、「富山市が取り組む健康なまちづくり」：第7回Smart Wellness City首長研究会アジェンダ.2013年2月6日（東京）；丸谷芳正（本プロジェクト実施者）同行
- (b) 丸谷芳正（本プロジェクト実施者）。「社会資本の活性化を先導する歩行圏コミュニティづくり」.2013富山・横浜インターシティフォーラム.2013.3.2（富山）
- (c) 中林美奈子,河原雅典,鳴尾明子,丸谷芳正（本プロジェクト実施者）。「お年寄りも前向きに！歩行補助車がある風景：歩いて暮らせるまちづくり活動の実践報告」.第11回みんなラボカフェ.2013.3.13（つくば）

7-3. 論文発表（国内誌 0 件、国際誌 0 件）

7-4. 口頭発表（国際学会発表及び主要な国内学会発表）

①招待講演（国内会議 0 件、国際会議 0 件）

②口頭講演（国内会議 0 件、国際会議 0 件）

③ポスター発表（国内会議 0 件、国際会議 0 件）

7-5. 新聞報道・投稿、受賞等

① 新聞報道・投稿

該当なし

②受賞

該当なし

③その他

該当なし

7-6. 特許出願

①国内出願（ 0 件）